京都女子大学発達教育学部紀要　2022，第18号

違いを尊重する教育
―エンパシーを高める３ステップの活用―

宮　崎　元　裕
（教育学科准教授）

本稿では，異文化や違いを尊重するための方法として，エンパシーを高める３ステップ（「受け止める」「なぜなのか考える，調べる」「共通点を探す，自分と結びつける」）を提案し，その具体的な活用について検討した。その中でも，特に「共通点を探す」ことの重要性を提示するとともに，その作業を効果的に進めるための方法についても検討し，他者・異文化を知るだけでなく，自分・自文化を知ることの重要性などについても明らかにした。さらに道徳教育などにおける３ステップの有効性についても提示した。

キーワード：違いの尊重，エンパシー，多文化教育，国際理解，外国人児童生徒

１．はじめに

グローバル化の進展に伴い，学校教育においても，異文化の尊重が重視されるようになっている。例えば，道徳教育においては，「他国の人々や文化に対する理解とこれらを尊重する態度を養うようにすることが求められる」とされている[1)]。また，徐々にではあるが，日本人の中での違い（多様性）の尊重も重視されるようになっている。

しかし，日本の学校教育においては，異文化や違いの尊重が，表面的なレベルでとどまっていることが多いのが現状である。例えば，日本の学校に在籍している外国人児童生徒の文化について学ぶ場合，異文化を知る段階でとどまっていることが多い。しかし，「知る」ことと「尊重する」ことは異なり，違いを知ったからといって，尊重できるとは限らない。むしろ，自分とは違うものに対しては，警戒心を抱くことが多いのが人間である。それにもかかわらず，違いを「知る」ことができれば，尊重できるかのように扱われてしまっていることは多い。知ることができれば，表面的に違いを尊重しているフリをすることはできるが，表面的な尊重だけでは，十分な尊重とは言えない。知ることと尊重することはイコールではなく，知った違いを尊重できるようになるためには，超えるべきハードルがあるにもかかわらず，そのハードルが軽視されているのではないだろうか。その結果，表面的には尊重しているフリはできるが，内面では違いを尊重できていないままで放置されているとしたら，この状態は，違いの尊重が重要度を増しているグルーバル化時代において危惧すべきゆゆしき事態である。このような問題意識から，本稿では，違いを尊重できるようになるために必要な方法（エンパシーを高める３ステップ）について検討する。

２．エンパシーを高める３ステップ

これまで筆者は，異文化や違いを尊重するためには，その文化を「知る」だけではなく，「なぜなのかを考える」「自分に結びつける」ことが重要であることを，イギリスの中学校用の宗教教科書の断食の説明ページをもとに何度か述べてきた[2)]。

この宗教教科書では，イスラーム教徒の断食

を説明するために，断食という行為の説明をするだけではなく，断食が現代のイスラーム社会にとってどのような役割を果たしているかを説明している。その上で,「断食のとき，イスラーム教徒は多くのことをあきらめなければなりません。あなたは，テレビ，電気，チョコレート，水道，暖房，仲間，気持ちよいベッドなどといった，あって当然と思っているものなしで生活をしたことがありますか」と問いかける[3)]。この問いかけは，イスラーム教徒のラマダンと，あって当然と思っているものがない非日常体験を結びつけることを意図したものである。断食の時，イスラーム教徒は日中飲食ができない経験を通して，食べ物のありがたさを再確認したり，貧しい者に思いを馳せたりする。一方，イスラーム教徒以外も，例えば，電気のない場所でキャンプをした時には，電気が当たり前になってしまっている日常に感謝したり，日常を相対化することにつながる貴重な非日常体験をしたりできる。このように，断食とキャンプという一見，関係がなさそうに見える経験を結びつけることによって，最初，断食がまったく理解できないと感じた者でも，「(キャンプと共通点のある)断食を行うイスラーム教徒の行動はわからなくもない」と感じられるようになる可能性は高い。

このように，異文化を知るだけでなく，その文化の現代的な役割を考え，自分と結びつけるというプロセスは，異文化を尊重するために非常に重要である。このようなプロセスを意識して異文化に接することによって，異文化に対するエンパシー（共感）を高めることができる。上記を参考して作成した３ステップ（表１）を，エンパシーを高める教育として本稿では提案したい。

表１　エンパシーを高める３ステップ

① 他者の話を「きちんと聞く」。他者のことを「受け止める，受け入れる」。
② 自分には理解できない他者のことを「なぜそうなっているのか考える，調べる」。
③ 自分と他者の「共通点を探す，自分と結びつける」。

①他者の話を聞いたり，他者を受け止めたりすることは，これまで異文化コミュニケーションにおいて重要とされてきた，判断保留や傾聴に該当する段階である。

②自分には理解できない他者のことを「なぜそうなっているのか考える，調べる」ことは，その他者の行為がなぜ生じているかの理由，背景，役割などを知る段階である。前述の教科書を例にすると，イスラーム教徒の断食が，食べ物のありがたさを再確認する機会になっていたり，貧しい者に思いを馳せて寄附をする機会になっていたりすることを知ることがこの段階に該当する。

③自分と他者の「共通点を探す，自分と結びつける」ことは，自他を結びつけることで他者に対するエンパシーを高める段階である。前述の例では，断食とキャンプを結びつけることが該当する。

この３ステップは，異文化に対するエンパシーを高め，異文化を尊重するために有効であると考えられる。しかし，我が国の教育現場においては，こうしたエンパシーを高める教育が意識的に行われていることはほとんどない。異文化を尊重しようとする取り組みにおいても，①と②の段階に注目した対応が推奨されることが多いが，③の段階は十分になされていないことが多い。以下では，この点について具体的に検討する。

3. ３ステップの具体的検討（王さんの事例）

ここからは齋藤ひろみ編『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』（凡人社，2011 年）に掲載されている事例を題材に，３ステップに基づいて，違いを尊重する方法を具体的に検討する。

(1)「ありがとう」を言わない

『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』の 11 ～ 12 頁では，日本の小学校に編入した，中国人の王さん（小２）を巡る「消しゴムとった！」というエピソードが掲載されている。

このエピソードは，佐藤さんの消しゴムを王

さんが無断で使ってなくしてしまったことで喧嘩をした，という状況を取り上げている。このガイドブックでは，佐藤さん，王さん，担任の先生のコメントを紹介した上で，この事例の対応を考える「ヒント」として，「国や地域によって，物の所有や公私の別についての考え方は違います。ほかの人が自分の持ち物を使っても，勝手に使ったとは考えないところもあります。友人間で物を共有することが一般的な習慣や文化になっている場合は，了解や感謝のことばがなくとも問題にならないのです」と説明している。その上で，その後の望ましい先生の対応を挙げているが，その対応の中でも，「先生は，物の貸し借りについて，王さんとゆっくり話をしました。先生は，この問題の背景には文化の違いがあることを理解しました」と「王さんが物を借りるときになぜ『貸して』や『ありがとう』と言わなかったのかを（子どもたちに）伝えました」という２つの対応に注目したい。

この２つの対応は，エンパシーの３ステップのうち，①「受け止める」，②「なぜそうなっているのか考える，調べる」に該当する対応である。①王さんの話を聞き王さんの考えを受け止めた上で，②「貸して」「ありがとう」と言わなかった背景に文化の違いがあることを理解し，その理解を日本人児童にも共有しようとしている。

このエピソードでは，この対応の結果，「子どもたちは，びっくりして聞いていましたが，王さんの行動が習慣の違いから来るものだと理解したようでした」となっている。

①「受け止める」と②「なぜなのか考える，調べる」の方法で，違いを尊重しようとしたことは評価できる対応である。この対応で王さんの「貸して」「ありがとう」を言わなかったことを受け入れることができるようになった児童もいると思われる。ただし，この対応だけではまだ十分ではない。特に，この事例の王さんのコメント（下記）を聞くと，王さんの考えを受け入れがたい，と感じる日本人は多いはずで，その場合は①②だけでは不十分である。

王さんは，先生の対応が行われる前に，この件について下記のようにコメントしている。

> 僕は，自分のがなかったから佐藤君の消しゴムを借りただけだよ。それなのに，泥棒なんて言うから，喧嘩になったんだ。なんで日本の友だちは，物を借りるのにいちいち聞いたり，借りたあとで「ありがとう。」って言ったりするんだろう。めんどくさい。僕なら，何も言わずに使ったって，別に何とも思わないし，友だちならそういうのは当たり前でしょ。

上記の，「貸して」「ありがとう」を言う日本文化を「めんどくさい」と否定し，自分は何とも思わない，という王さんの言い分を聞くと，王さんに反感を持つ日本人児童も多いはずである。その反感が，上記の対応だけで解消されるかというと必ずしもそうではないだろう。

それゆえ，３ステップの③「共通点を探す，自分と結びつける」が必要になる。この場合，王さんの「貸して」「ありがとう」を言わないこととの，共通点を探すことになる。共通点は様々な形で見つけることができるので，答えは１つではないが，例えば次のように共通点が考えられる。

> 日本人の私も，「貸して」「ありがとう」と言わないことがある。妹の服を借りる時は，貸してと断らないことが多いし，ありがとうを言わないこともある。貸し借りが当たり前になっているし，親しい姉妹間ではいちいち断らなくても良いと思っている，この感覚と王さんの感覚は共通しているのかもしれない。日本人の私は，これが許されるのは仲の良い家族だけだと考えているけれども，中国人の王さんは，その対象が家族だけでなく，仲の良い友人にまで広がっているのかもしれない。

上記のように，自分と結びつく共通点を見つけることができれば，「日本人と中国人はまったく違う」のではなく，「日本人と中国人は，程度が違うかもしれないが，共通点もある」と考えることができるようになる。「まったく違

う」他者を尊重することは難しいが，（程度の違いこそあれ）共通点がある他者であれば，受け入れて尊重することが可能になりやすい。

このように，③「共通点を探す，自分と結びつける」ことができれば，①「受け止める」②「なぜなのか考える，調べる」だけで終わるよりも，違いを尊重できるようになる可能性が高まる。

（2）掃除をしない

次いで，王さんの別のエピソードを題材に３ステップのエンパシーの実践を検討する。ガイドブックの 15 ～ 17 頁には，王さんの「掃除をしない」というエピソードが掲載されている。このエピソードでは，王さんが学校掃除をサボることが問題視されており，王さんの言い分は下記である。

> 汚いし，水は冷たいし，雑巾で床を拭くなんて嫌だ。中国の学校では掃除の時間なんてなかったよ。掃除は学校で雇われている掃除の仕事の人がいて，その人たちがしていたんだ。（中略）僕たちは学校では勉強をすることが大事でしょ。掃除や当番なんかの仕事が多すぎるよ。

ガイドブックではこの事例の「ヒント」として，「日本の学校教育では生活面の学習も重視されていますが，ほかの国・地域ではそうとは限りません。『掃除』はその象徴的な活動だと思われます。日本では，グループで仕事を分担しながら掃除をすることを通して，衛生観念や生活面の規律について学ばせます。また，リーダーシップや責任感，協調性や公正性などを養うことが目指されています。しかし，こうした学校文化を持たない国や地域もあるのです。掃除や給食は，日本では生活面の指導に含まれますが，文化を共有していない人には理解しにくいものです。ですので，子どもだけではなく，保護者にも理解してもらうことが大事です」と説明が加えられている。

そのヒントをもとにした対応として，「王さんにもなぜ掃除をしたくないのかを尋ね，怠けているだけではない理由として，中国では清掃業者が掃除をすることや，掃除などの活動は学校の教育に位置づけられていないことを知りました。その後，みんなで掃除をすることや，自分が使う教室を自分できれいにすることの大切さを話し合いました」と記載されている。

この対応についても，３ステップのうち，①「受け止める」，②「なぜなのか考える，調べる」は行われている。王さんに話を聞くことは①「受け止める」であり，中国で掃除が学校教育に位置づけられていないという理由を知ることは②「なぜなのか調べる」になる。しかし，③「共通点を探す，自分と結びつける」まではなされていない。

この事例の共通点の探し方としては，例えば，以下が考えられる。

> 王さんは学校を勉強するところだと思っているから，掃除をする必要がないと考えている。私は学校で掃除をすることは当然だと思っている。でも，私が「勉強するところ」だと思っている塾で，「掃除をしましょう」と言われたら，「なんで勉強のために来ている塾で掃除をしないといけないの」と思うだろう。塾での掃除に対する私のこの感覚と，学校での掃除に対する王さんの感覚は似ているのかもしれない。

上記のように共通点に気づくことができれば，「学校掃除を嫌がる王さんはありえない。理解できない」と最初感じていたとしても，「塾に置き換えると，自分もそう感じる。王さんの考えも理解できなくない」という感覚に変化し，王さんの考えを受け入れて尊重する気持ちが高まることが期待できる。

（3）王さんの２つの事例検討から

上記では，２つの事例を題材にエンパシーを高める３ステップを具体的に実践し，その結果，この３ステップを意識的に行うことの重要性を提示した。題材として用いた『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』は，外国人児童生徒の文化や考えを尊重した対応方法を学ぶ

上で，貴重な情報が多く記載されているガイドブックである。しかし，そのガイドブックですら，３ステップの①②は重視されているものの，③については十分ではない。③の「共通点を探し，自分と結びつける」ことを意識的に行うことができる教員や児童・生徒を増やしていくことが，より多様性が尊重できる教室作りにつながるのではないだろうか。

４．３ステップの効果的な活用のために

（1）対応の前提としてのエンパシー

このような具体的な事例を題材に，異文化へのエンパシーを高める重要性を筆者が授業で扱った際に，しばしば学生から懸念されることがある。その懸念とは，「ありがとうを言わない，掃除をしない王さんの気持ちはわかったけど，王さんをそのまま放っておいて良いのか。具体的に王さんにどう指導すれば良いのか。王さんのことが理解できてもできなくても，王さんにありがとうを言えるようにすること，掃除をさせることが教育ではないか」というものである。

具体的な対応方法を考える「前提」になるのがエンパシーである。王さんの事例でも，王さんのことが理解できていないと，ただ単に，「ありがとうを言うように」「掃除をするように」という指導になってしまう。これは，ただ単に日本文化を押し付けているだけの同化教育である。教員が，王さんのことを尊重せず，日本文化を押し付けているだけでは，児童生徒も異文化を尊重する気持ちにはならないだろう。

また，王さんの側から考えても，自分の文化や考えを理解しようともせず，一方的に日本文化を押し付けてくるだけの教員とは信頼関係など築きようもない。むしろ反発を招くだけである。

３ステップを活用することで，まずは教員自身が，自身の固定観念から解放され，異文化に対するエンパシーを高めることが，違いが尊重される教室作りへの第一歩である。その上で，エンパシーを高める３ステップを多くの児童生徒が身につけ，自ら日常生活で実践できるようになれば，違いを尊重できる教室にさらに近づく。

（2）共通点探しの試行錯誤

エンパシーの３ステップを，授業で学生に実践させた時に，学生が戸惑うことが多いのは，③「共通点を探す，自分に結びつける」である。このような作業を意識的に行った経験が少ないことが原因だと思われる。③がうまくいかない場合に，③のヒントになるのが，②「なぜそうなっているのか考える，調べる」である。②で様々なことを調べているほど，③自分に結びつける材料も増える。③で行き詰まった場合は，②に戻って，③のヒントとなる材料を増やしつつ，③に再挑戦する，という繰り返しを行うことで，③「共通点を探す，自分に結びつける」ことが可能になりやすい。

②については，インターネット検索の活用も有効である。例えば，王さんの事例だと，「ありがとう and 中国人」「学校掃除 and 中国（世界）」などで検索すると，③のヒントとなる情報を数多く入手できる。

③がどうしてもうまくできない場合には，教員側が，③につながりやすい②の情報を事前に準備しておくことも有効である。

（3）自分と自文化を知る

また，③共通点探しを円滑に進めるためには，自分や自文化についての理解も重要になってくる。②で他者のことをいくら調べたとしても，自分のことを理解していなければ，③で自他を結びつけることはできない。自分のことや，自文化をよく知っているほど，他者との共通点を見出しやすくなる。

例えば，断食の事例では，断食と共通点を見出しやすい日本の文化を知っていれば，結びつけることが容易になる。お盆の精進料理や，正月のおせち料理などは，特定の時期に普段とは異なる食生活をする点で断食と共通点があり，こうした自文化を知っていれば共通点に気づきやすい。

また，王さんの「ありがとうを言わない」事例の場合は，友だちにはありがとうを言うのを

当たり前だと思っている自分だけでなく，例えば，家族に対してはありがとうと言わないこともある自分を自覚していれば，王さんとの共通点に気づきやすい。

王さんの「掃除をしない」事例についても，学校では掃除をするものの，家や塾では掃除をしない自分のことを自覚できていれば，自分と結びつけやすくなる。

要するに，自分の様々な面について普段から自覚しているほど，③共通点探しが円滑に進み，共通点探しのハードルが下がる可能性が高い。この点については，下記のアイデンティティに関する説明とも関係がある。

> 私たちに求められている「自分探し」とは，様々な他者とのかかわり合いのなかで，色々な「自分」を発見していくことではないだろうか。たった１つの「本当の自分」にこだわるよりも，「自分」の多面性を受け入れていくことが，ひいては多様なアイデンティティへの理解につながるだろう[4)]。

たった１つの「本当の自分」探しにこだわりすぎるのではなく，自分には様々な面があることを認め，自分が複数のアイデンティティを併せ持っていることを自覚することは，異文化コミュニケーションにおいて重要である。自分や自文化を固定的に考えていると，他者や他文化との共通点は見つからない。自分や自文化が様々な面を持っていることを知り，他者や他文化にも様々な面があることを知っていれば，自分・自文化と，他者・他者文化の重なりあう点（共通点）が見つけられる可能性は高まる。

日本の学校教育においては，依然として，「普通が一番」という価値観が共有されている場面も多いが，「普通が一番」が強調されすぎると，普通から外れるような自分の特徴をネガティブに捉えてしまい，自分の様々な面を肯定的に受け入れることが難しくなってしまう危険性もある。そのため，そもそも「何が普通なのか」というように「普通」を問い直す機会を提供しつつ，普通を強調しすぎないことも必要かもしれない。

また，日本文化についても固定的に捉えるのではなく，日本文化の時代・地域による多面性などにも児童生徒が気づけるような機会を提供することも必要であろう。

自分と自文化を知り，その多面性に気づくことができれば，③共通点探しのハードルは確実に下がる。また，そもそも，他者や他文化を知ることも自分や自文化を知ることにつながる。そのため，他者や他文化を合わせ鏡としつつ，自分や自文化を客観的に見る機会の提供も必要である。

（4）日本人同士の違いの尊重にも活用

本稿では，ここまでエンパシーの３ステップを活用する具体例として，イスラームの断食や中国人児童といった異文化を取り上げて検討してきた。しかし，このエンパシーの３ステップが活用できるのは，文化背景や国籍の異なる異文化に対してだけではない。当然のことながら，日本人同士でもお互いの価値観や考え方の違いに，違和感を持ったり，違いに起因する衝突が起こったりすることがある。そのような場合にも，エンパシーの３ステップを活用できる。

その際に留意すべきことは，日本人は，違いが明らかになることを恐れる傾向があることである。「違いが明らかになった相手とはわかりあえない」という感覚を持っている日本人は多い。そのため，他者に対して，「自分と異なる」という違和感を持った時にも，それを表出するのではなく，隠そうとする傾向が強い。お互い違和感を持ちつつ，それを隠して，表面的に同じ感覚を共有しているかのように装うことも多い[5)]。

違いが明らかになった他者とも，自分との共通点が見つかれば，共生していくことができる，という感覚を持つことは，グローバル化時代で生きていくためには必須である。そして，違いが明らかになることを恐れすぎないようになるためにも，エンパシーの３ステップは有効である。最初は受け入れられなかった違いを，３ステップにより自分との共通点を見出すことで，

受け入れられるようになった，という経験を積むことができれば，「違うことは悪いことではない。違う相手を受け入れて共生することができる」という感覚が強まることが期待できる。

5．おわりに

本稿では，エンパシーを高める３ステップの活用について検討してきた。そして，このエンパシーの３ステップは知的作業であるため，学校教育でも有効に活用できる可能性が高い[6)]。

例えば，道徳教育などでよくなされるように，「異文化を尊重しましょう」「他者に優しくしましょう」と言われただけでは，尊重する気持ちや優しさを身につけることはできない。しかし，最初は，尊重する気持ちが持てなかったとしても，エンパシーの３ステップの作業を適切におこなうことができれば，尊重する気持ちが持てるようになる可能性は高い。本稿で扱ったように，「受け止める」「なぜなのか考える，調べる」「共通点を探す，自分と結びつける」というエンパシーの３ステップは，知的作業として行うことが可能だからである。知的に調べ，知的に共通点を探すという作業をこなすことで，違いを尊重できることを，児童生徒に伝え，身につけてもらうことができれば，異文化を尊重できる者が増える可能性が高い。

感情面に訴えて違いを尊重させる方法も場合によっては有効かもしれないが，その方法だけでは，本心から違いを尊重できなかった者は，表面的には尊重したフリを強いられてしまう可能性が高い。「違いを尊重できない」ことを表明すれば，「尊重できない冷たい人間だ」とみなされてしまうのだから，尊重したフリをするしかなくなるわけである。道徳教育の場面で，本心を隠した建前だけのやりとりが展開してしまうことは多くあるが，そうなってしまう理由の１つが感情面に訴える方法にあると考えることもできる。

それを防ぐためにも，知的作業による違いの尊重という選択肢を児童生徒に提示することが重要になる。３ステップのエンパシーが共有されている空間では，「違いを尊重できない」ということは非難されることではなく，３ステップのエンパシーへの取り組みのきっかけとなるものとして肯定的に受け入れられるものだからである。「違いを尊重できない」という発言をきっかけに，３ステップに取り組んだ結果，最初は尊重できなかったことが尊重できるようになった，という経験を繰り返していくことが，これまで以上に違いを尊重する教室を成立させるために必要である。

注

1）文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科　道徳編』2017 年，62 頁。

2）宮崎元裕「外国人児童生徒との違いを尊重する教育」『京都女子大学発達教育学部紀要』第 14 号（2），2018 年，23 ～ 28 頁。

3）S.C. Mercier. *Muslims*（“Interpreting Religions” series）. Heinemann Educational Publishers, 1996（穂積武寛訳「ムスリムたち」大正大学宗教教科書翻訳プロジェクト編『世界の宗教教科書』大正大学出版会，2008 年）pp.50-51.

4）伊藤夏湖「アイデンティティと他者」池田理知子編『よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房，2010 年，116 ～ 117 頁。

5）この点を指摘した文献は多いが，例えば，一般向けの著作としては，平田オリザ『わかりあえないことから－コミュニケーション能力とは何か』講談社，2012 年，99 ～ 105 頁。

6）エンパシーが知的作業という認識は，ブレイディみかこの著作『ぼくはイエローでホワイトで，ちょっとブルー』（新潮社，2019 年），『他者の靴を履く　アナーキック・エンパシーのすすめ』（文藝春秋，2021 年）によって，日本でも広まりつつある。